

6～7世紀の中国における国家構造と国家意識

稲住, 哲朗

<https://doi.org/10.15017/1500460>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名	稲住 哲朗			
論 文 名	6～7世紀の中国における国家構造と国家意識			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	川本 芳昭
	副 査	九州大学	教授	濱田 耕策
	副 査	九州大学	准教授	中島 楽章
	副 査	九州大学	講師	船田 善之

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

上記の論文は、6世紀から7世紀前半における中国の国家構造とそれを支えた人々の国家意識について、王朝支配集団を構成した人々のパーソナリティ、集団の構造如何などの観点から考察したものである。

第一章は、東魏・北齊前期の政権内部の実態を、当時の権力者である高洋とその母である婁太后の関係を詳細に跡づけることによって、従来の胡族、漢族という観点からではない、個々人の動きのなかから解明したものである。

第二章は、北齊後期に宰相として政権を担った漢族出身の祖珽について、彼のもつ希有のパーソナリティを解明し、それが北齊の政治に与えた影響の大きさを明らかにしている。本論文の中でも出色の成果と言える。

第三章は、北齊政権滅亡後、北齊出身者が北周・隋・唐に取り込まれた中で、どのような境遇におかれ、またその国家に対しどのような意識を持っていたのかという点を、北齊滅亡後に北周に入った盧思道という漢族士人の動向と、その著作である『周齊興亡論』を通して考察している。従来の学界で取り上げられることのなかった分野を検討し、北周・隋代における北齊系士人の動向、意識を解明している。

第四章では、集団論の観点から、従来提起されている当該時代の支配集団（関隴集団、北齊を滅ぼした北周系の人々によって構成され、北周隋唐帝国の支配集団となる）について、第三章までの考察を踏まえ、北齊系士人の果たした役割が大であったことを解明している。

本論文の新見解は、第一に、政治との関わりで当該時代において活躍した諸群像をそのパーソナリティ面に注視しつつ解明したという点にある。

その第二は、北齊が北周によって滅ぼされたため従来否定的にとらえられてきた旧北齊系士人について、その隋唐帝国形成において果たした役割の大きさを解明した点にある。

その第三は、定説となっている、関隴集団は北周、隋、唐と受け継がれ唐中期に至るとする考えに大きな修正をせまっている点にある。すなわち、北齊系士人の果たした役割を解明した点をふまえ、関隴集団がすでに隋建国の時点で大きく変質していたこと、そのなかに北齊系が数多く入り込んでいたことを指摘するのである。

この点は、今後降って唐代の研究を行ったうえで十分解明される必要があるが、さらなる進展が期待される。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。